

第1回アスク日本語教育セミナー

「多読を使ったクラス授業」－多読の効果・教材の選び方・教師の役割－

日時:2008年6月7日(土) 14:00~16:00

会場:株式会社アスク2階

講師:NPO 法人日本語多読研究会 栗野 真紀子 先生

(NPO 法人日本語多読研究会 HP <http://www.nihongo-yomu.jp/>)

参加費:無料

来場者:21名(主に日本語学校講師)

「多読って、本をたくさん読ませるだけ?」「どんな本を読ませればいいの?」「教師は何をやるの?」このように「多読に興味はあるけれど、やり方や教え方がわからない」という先生方の疑問にお答えするため、NPO 日本語多読研究会の栗野先生を講師にお招きして学習者の声や授業風景など、実例を交えてお話いただきました。

多読とは?

辞書を使わなくても、すらすら読めるレベルの読みものを楽しみながらたくさん読むこと、これが多読です。多読しながら、やさしいレベルから少しずつ難しいレベルに進んでいくうちに、日本語が身につきます。

●多読の4つのルール●

1. やさしいものから読む
2. 辞書を引かない
3. わからない言葉は飛ばす
4. 進まなかったらやめる

(NPO 法人 日本語多読研究会)



【セミナー概要】

当日は、「多読とは？」という説明から始まり、『にほんご よむよむ文庫』の原点となった英語多読教材についての説明や、栗野先生が実際に使っている多読教材（絵本、小説、漫画など、スーツケース一杯どっさり！）を見ながら、多読をするときのポイント、本選びの具体的なポイントを説明していただきました。セミナー終了後、きっと多くの先生方が書店（もしくは古本屋？）に走ったのではないかと思います。

また、栗野先生が実際に多読の授業を行なっている風景をビデオ上映したり、多読の授業を受けた学生さんの感想コメントを紹介したりしました。

講演終了後の質疑応答も大変盛り上がり、予定の講演時間を大幅にオーバーする結果となってしまいましたが、それだけ、講演の内容が興味深いものだったということと、参加された先生方が大変熱心だったという証ではないかと思います。

セミナー終了後のアンケートでは、「多読とは？から実際の授業風景まで、とてもわかりやすかった」「漠然としたイメージだったものが、かなり具体的にイメージできた」「自分の授業でもぜひやってみたいと思った」など、嬉しいコメントをたくさんいただきました。

私たちにとっても、現場の先生方の多読への関心の高さを伺うことができる大変良い機会でしたし、参加者の先生方にもご満足していただけて、第 1 回のアスク日本語教育セミナーは大成功に終わりました。

栗野先生、多読研究会のみなさま、ご参加くださった先生方、本当にありがとうございました！

【講演内容】

※当日の栗野先生にお話しいただいた内容を、以下に簡単にまとめました。

当日、セミナーに参加できなかった方はぜひご覧ください。

●多読の4つのルール

1. やさしいものから読む

⇒自分のレベルに合わないものを選んで、結局読み終わらなければゼロと同じ！

2. 辞書を引かない

⇒辞書を引くと、読むスピードが落ちる！読むスピードが落ちると、読む量が減る！だから、辞書は(できるだけ)使わない。

3. わからない言葉は飛ばす

⇒1. 2と同じ。わからない言葉は大胆にスキップして、とにかくどんどん前に進んで行こう！スキップだらけで最後まで行ったら、それは選んだ本のレベルが間違い！

4. 進まなかったらやめる

⇒なかなか進まない本やつまらない本は途中でやめてしまう！先が知りたいと思えるような自分に合った内容の本をたくさん読もう！

●多読授業の方法

みんなで一斉に読むと、一人ひとりのドキドキ・わくわく感が減ってしまうので、思いきって、一人ひとり好きなものを読ませる。

栗野先生の授業では、教室の真ん中に本をどっさり置き、学生が各自好きなものを自由に手に取って行き、席で静かに読む、というスタイル。

学生は読書記録に、本のタイトル、ページ数、かかった時間、コメントを記録する。ページ数を記録することで、自分の累積読書ページ数がわかる。コメント欄の記載は、書いても書かなくてもよい。

※当日は授業の様子がビデオ上映されました。



●多読教材を選ぶポイント

- ・とにかく内容(ストーリー)が面白いもの
- ・絵が多いもの(場面が推測しやすい)
- ・旬なもの ex.ドラマ化された小説やマンガ、話題の新書などが人気
- ・読みやすいもの ex.マンガやケータイ小説が人気
- ・学生の興味に合ったもの ex.理系の学生にはモノづくり系のノンフィクション(『プロジェクト X』など)が人気

●教師の役割

教師の役割は、とにかく学生が楽しくたくさん読めるようサポートすることに尽きる。教室を回って、学生からの質問に簡潔に答えたり、あるいは答えないで先を促したり、学生がレベルに合わないものを読んでいたらアドバイスをしたりする。基本的には、学生の読書への集中を邪魔しないように、あまりおせっかいな声掛けはしない。

学生の様子をよく観察して、各学生が何を read したか、どんな様子だったか、どんな質問が出たかを毎回メモしておく。前回の授業の時の様子と比べて、本の選び方や読み方のアドバイスをする。

●多読の効果

多読の授業を受講した学生からのコメントの一部

- ・本屋に行くようになった
- ・本を携帯するようになった
- ・日本語を読むことが怖くなくなった
- ・読むのが早くなった
- ・読める漢字が増えた
- ・書くことや話すことも上手になった → 四技能は切り離せない

●特別ゲスト C さんの話

栗野先生の学生さんである C さんが急遽かけつけてくださり、多読授業の感想をお話ししてくださいました。以下は、C さんの感想の抜粋です。

「多読の授業は私にとってとてもいい勉強になりました。あんなにたくさん本を読んだ経験は初めてだったからです。授業が始まる前、栗野先生は私たちに、読書をする時に注意しなければならないことを丁寧に説明してくださいました。例えば、自分のレベルに合った本をよむこと、楽な気持ちで読むこと、わからない言葉を辞書で調べないことなどです。初めは、わからない言葉を辞書で調べないということは不安でしたが、今はそれができるようになって、本を読むスピードが上がりました。そのおかげで、私は読書習慣が養われたと思います。」

● 質疑応答

★栗野先生の講演後、参加者の方から様々な質問が飛び交い、予定時間をオーバーしてしまうほど、大変活発な質疑応答となりました。以下はその抜粋です。

どうすれば学生に「多読」を続けさせられる？

Q: 自分の学校で多読の授業を5回やってみたが、次に来ない学生が多かった。
続けさせるにはどうしたらいいか？

栗野先生: 5回では学生も多読の面白さや効果がわからないので、できれば半年は続けてほしい。
それが無理であれば、2時間5回から1時間10回に変えて回数を増やすなどの工夫をする。
また、授業の初めに多読のルールや意味をしっかり説明することも大切。本を取り換えに来た学生を褒め、読み進まない本は止めることを推奨する。手に取る本の量が増えて、自分の好みものに出会えば、きっと面白さがわかるはず。教師も、毎回魅力的な本を必ず学生に紹介するようにしなければならない。
また、授業後は、(読まないで返していいからと言って)必ず2冊は本を借りて行かせると、少なくとも本に触れる機会は増える。
教師も学生に100%を求めないで、色々な工夫をしながら少しずつやっていきましょう！

本のレベルはどうやって決める？

Q: 学生が読む本のレベルはどうやって決めさせればいいですか。

栗野先生: 初めは学生の主体性に任せ、あまりにもレベルに合わない本を読んでいる学生がいたら、「どう?」「おもしろい?」と声掛けをする。
しばらく様子を見て、あまりにも進んでいなかったら、レベル相応のものをさりげなく勧める。
「難しいでしょ?」と声を掛けたり、強制的に与えてはダメ。
辞書を使いたがる学生には、絵や文脈から推測することを促したり、来週までに進まなかったら別の本に替えよう、などのアドバイスをする。

マンガも「多読」?

Q: 多読の授業でマンガを読ませてもいいのでしょうか。

栗野先生: 学生の興味に合わせることが最優先なのでマンガも良しとしている。
マンガは会話の宝庫なので、それはそれで役立つ。マンガから始まり、徐々に小説に移行する学生も多い。

多読授業の時間はどのぐらい？

Q: 読書の時間を2コマとると寝てしまう学生がいます。
授業時間はどのぐらいとればいいでしょうか？

栗野先生: 最初に本を選ぶ時間があるので、45分だと集中する時間が短い。2コマ以上とった方が後半に集中できる。中級・上級のクラスだと2時間はあっという間。初級で初めての学生にするようなときは20分ぐらいから始めて、徐々に延ばしていくという方法も。
レベルや学生の様子を見ながら調整する。

多読に関する参考文献

- ・酒井邦秀(2002)『快読！100万語！～ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫・筑摩書房
- ・酒井邦秀・神田みなみ編著(2005)『教室で読む100万語－多読授業のすすめ』大修館

NPO 法人日本語多読研究会 HP <http://www.nihongo-yomu.jp/>